

サーキット・ライダー 2002年 3月号

復活：神の恵み

「本当にこの人は神の子だった。」 マルコ 15：39.

アメリカ人の教会の牧師になって7年目、正しくは6年と8ヶ月が過ぎたところですが、これまで実に多くの葬式、追悼式をしてきました。既に30くらいしています。勿論これは教会員だけでなく、教会外の方の葬儀依頼もあるからですが、アメリカ一般になのか、この東部の傾向なのか判断できませんが、ニュージャージー北部で主流派教団と呼ばれるメソジスト、改革派、ルーテル、長老派等の教会に限って言うとも老齢化がどんどん進んでいるように思います。

この老齢化する社会の中で、人の生死に関わる時間が益々増える中、死への取り組みの必要性を強く感じます。皆さんに誤解のないよう、上手に言い表せるかどうか分かりませんが、最近、自分が司式するしないに関らず葬儀に強く聖霊の働きを感じるとともに、神の癒しを覚えます。勿論、葬儀時には愛する一員を失った家族、友人は深い悲しみの内にありますし、特に故人が若くして昇天した場合、辛さはいっそう深いのですが、そのような悲しみの場にあっても、平安、希望を感じます。

今年1月から3月初旬現在、自分が司式した追悼式一つ、列席した葬式が二つ。100歳と9ヶ月の御婦人、70代前半の御婦人、70代後半の男性とそれぞれに悔いのない人生を送られた方々の葬儀でした。特に78歳で亡くなった男性は私の個人的友人で、彼とは年齢こそ違いますが、Drew神学校に同じ年に入学し、同じ授業を幾つか取った仲で、奥さんもメソジスト教会の牧師で私の友人なので、尚更そう感じたのかもしれませんが。彼、ステーブ・ダンカン（元ニューヨーク・デイリー・ニューズ新聞の記者で、1950年代前半から勤め、60年代初頭にアフリカン・アメリカン（黒人）で初めて同社で編集局長になった人物で、若い頃にはマーチン・ルーサー・キング牧師の公民権運動に協力し、キング牧師の記事を書いたり、キューバのカストロ首相が初めて訪米し、ニューヨークに寄った折りには独占インタビューをするなど活躍しました。また、その後もブルックリン大学やコロンビア大学のジャーナリズム科で教鞭を取るなど、記者としてのみならず教育者としても貢献しました。

私が彼と知り合った時は、彼が新聞社を引退した後で、神学校の仲間としてでしたので、彼が元新聞記者だとは知っていましたが、そのような華々しい経歴の持ち主だとは葬儀にでるまでついぞ知りませんでした。私の知っている彼は、小柄、穏やか、真摯（紳士）で、一般的新聞記者のイメージとは逆に口当たりも柔らかく、とにかく人当たりが良い人物で、彼の敬虔な信仰の姿勢にはいつも敬服させられました。ここ数年病気がちでしたが、メソジスト教団新聞「リレー」の編集部で奉仕をし、私の書いた「広島原爆ドーム訪問、平和へのアピール」を転載して下さったり、パークリッジの日本人伝道やパークリッジの教会の事を記事にして紹介してくれたりと常に友情篤い信仰の先輩でした。

彼の葬儀に出席中、彼の人柄、信仰が絶えず私の胸裏に語りかけてくるようでした。彼の末期の言葉が式中に遺族によって読み上げられました。それは自分の死後、葬儀の列席者、友人、家族に宛てて残した物で「自分はこれが読まれる頃には、父なる神の御許にいます。だから別れを惜しんだり、悲しまないで下さい。むしろ、喜んで讃美して下さい、、、。」と語っていました。それは正に悔いの無い人生、信仰に生きた人生の証しであり、御国、永遠の命への希望の言葉でした。黒人差別を自ら体験した幼少年時代、青年時代、ジャーナリストとして公民権運動に関った働き盛り、教育に奉げた熟年期、執筆を通して宣教、社会奉仕に関った、晩年と波瀾万丈の人生でしたが、彼は常に永遠の命、復活の希望を抱いて生きたような気がします。

イエスは十字架の上で「成し遂げられた」（ヨハネ19：30.）「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」（ルカ23：46.）と言って息を引き取りました。その生涯はあまりにも短く、十字架の死はあまりにも過酷でした。しかしイエスは神の御旨を信じ、神の国、永遠の命を宣べ伝えました。彼はあくまで神の御心に従い、人の子としてこの世で為すべき事は全て終えて生き絶えました。イエスが伝道に携わったのは僅か3年でしたが、彼はこの世界をひっくり返すほど鮮烈に生きました。そして神の教えを私達に分かり易く紐解いて下さいました。その生き様、死に様にイエスを十字架に掛けたローマの兵隊、百人隊長をして「本当にこの人は神の子だった。」と言わせたほどでした。彼はイエスの死に人知のはかり知る事のできない崇高な思い、神の国への希望を見たのではないのでしょうか。

それ故に、ひたすら信仰に生きた生涯の故に、神は復活という恵みをイエスにそして私達信じる者にお与えになったと私は思えてなりません。皆様、実り多い受難週、復活祭を御迎え下さい。

吉松 純